慶應義塾大学における第二外国語としてのスペイン語教育

慶應義塾大学経済学部日吉専任講師　　加藤（かとう）　伸吾（しんご）

加藤：よろしくお願いいたします。

まずは、この機会をいただいたことに感謝したいと思います。といいますのも、こういうところで話す機会を頂戴しないとなかなか反省もしないので、そういう意味も含めて、今回お話しする機会をいただいたことに感謝したいと思います。

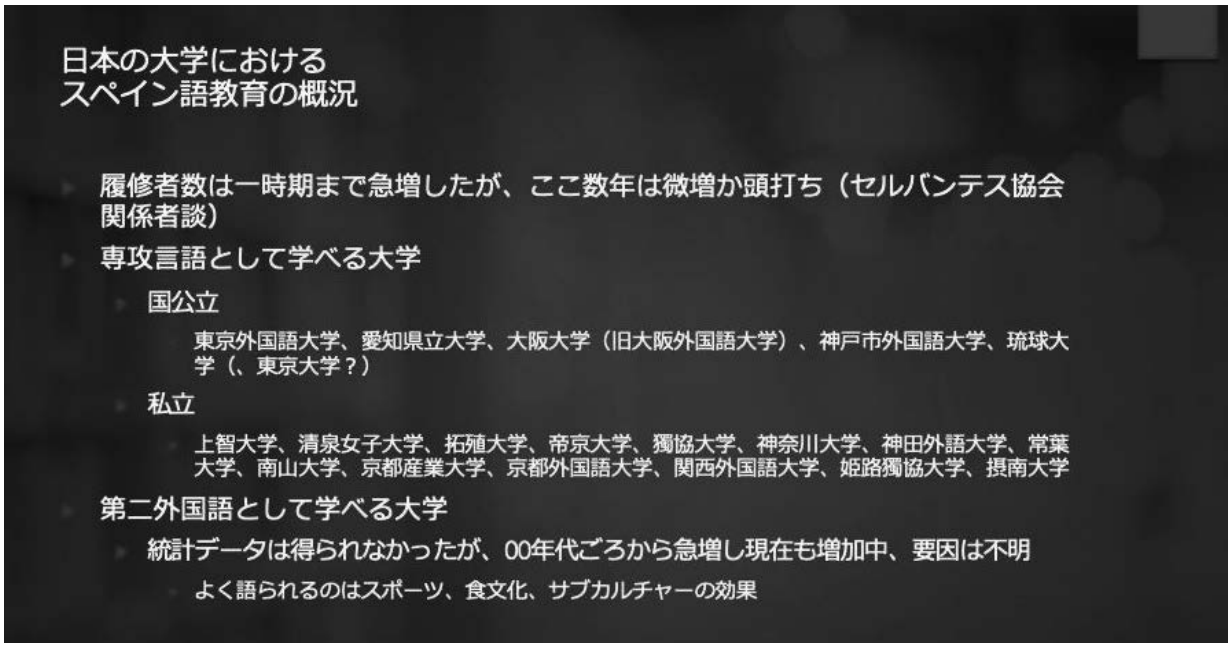
１．日本におけるスペイン語教育

最初に、日本の大学におけるスペイン語教育全体のお話から入っていったほうがいいかなと思いまして調べたのですけど、2000 年代に入ってスペイン語教育が急に拡大したんですよね。それまでももちろんスペイン語の人口というのは数億人いたわけなんですけど、ここで急増したんですよね。一時期までというのは、2000 年代、特にゼロゼロ年代までだと思いますけども、ここ数年は微増か頭打ちだというようなことだそうです。

これは数字があるわけではないのですけど、セルバンテス協会というのがありまして、これはゲーテ・インスティトゥートとか、ブリティッシュ・カウンシルとかに準じるような、スペイン語、カスティーリャ語やスペイン語圏文化のプロモーションをするようなスペイン政府の外郭団体みたいなものですが、そこの方が言っていましたので、それを載せさせていただいています（スライド１）。

専攻言語として学べる大学も結構あります。いずれも非常に昔からあるものです。私は上智のイスパニア語学科というイエズス会の大学で学びました。ほかにも、もちろん東京外大があり、大阪外大、残念ながらなくなっちゃいましたが、大阪外大もあり、神戸市外大があり、国公立でい

スライド１



うと、琉球大学もそうなんです。あと、東大に中南米科というのがありまして、中南米の地域研究をやっている人、エリアスタディーズをやっている人がたくさんいらっしゃいます。なので、事実上、東大の１、２年生の駒場キャンパスでは学べるようになっているんだと思います。私立ではこのような大学（スライド１）がありますけれども、これもいずれもそれなりのというか、歴史のあるところです。ということは、専攻言語としては結構昔から学べたんですよね。

だけど、第二外国語としてスペイン語をやりたいという人が伸びてきたんだと思います。残念ながら統計データは得られなかったんですが、ゼロゼロ年代頃からというのもそうですし、現在も一応増えてはいますけれども、頭打ちなんじゃないかということは言われています。

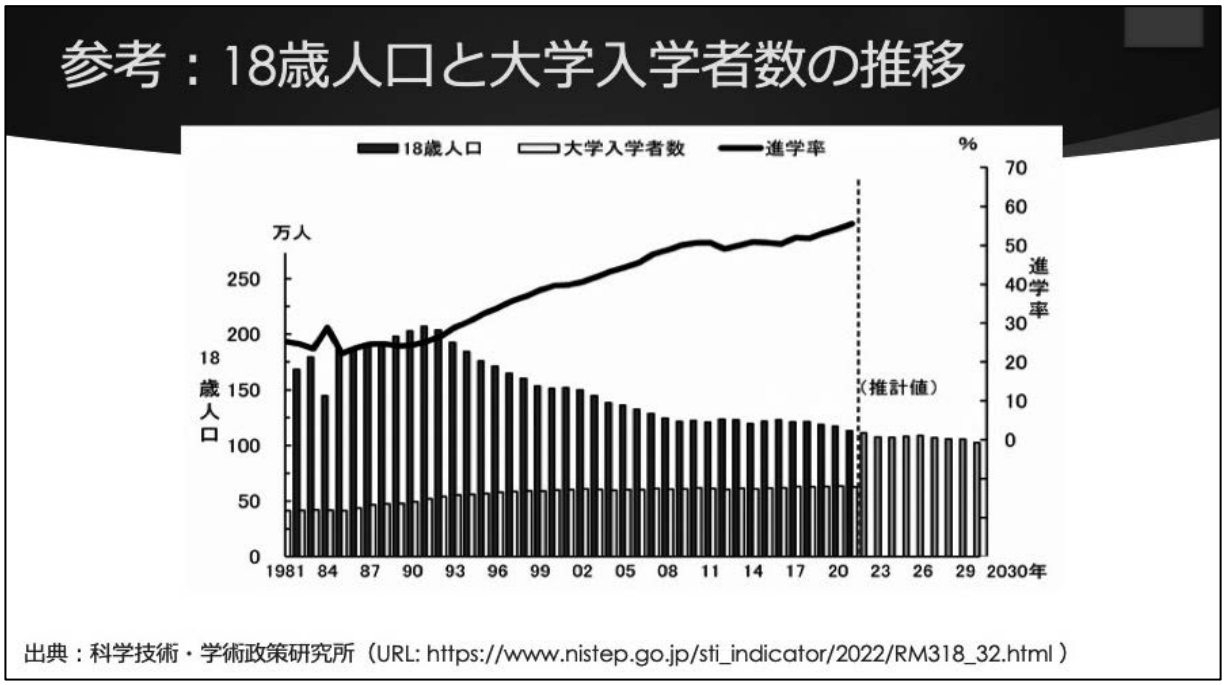
要因は、セルバンテス協会の人もよく分からないんだそうです。よく言われるのは、スポーツ、特にサッカーですよね、スペインサッカー。でも、サッカーって昔から、トヨタカップの中継とかは、私の子供の頃からやっていたので、何でサッカーなのか。確かに日本でもサッカーはプロリーグができて、日本人が向こうのスペインリーグに、リーガ・エスパニョーラに行くようになったりとかしていますけど、それだけで説明するのもな、と思うんですよね。でも何かスペインの、ラテンアメリカじゃなくて、スペインに関する興味というものが増えてきたんだそうです、とよく言われます。本当のところは、なかなかよく分からないということだそうです。

参考までにですけど、進学率は増えていると。これは皆さん御存知かと思いますけど、入学者数はじわじわ増えてきているけれども、18 歳人口はどんどん下がって、この先もずっと下がっていくということですよね。この間が狭くなっていくということだから、大学には入りやすくなっているということだと思います（スライド２）。それは一般的な傾向としてありつつ、だんだん、この辺りからスペイン語を第二外国語として履修したいという人たちが増えているんですよ。ここが狭くなってくるタイミングと、スペイン語の履修者が増えるというタイミングは実は同じなんじゃないかと。相関関係があるのかもしれないとか思ったりしますけど、分からないです、その辺は。

２．慶應義塾大学の第二外国語教育

今日の本題の慶應義塾大学での第二外国語の教育体制に関してお話をしたいと思いますが、慶應義塾大学は、日

スライド２



本にいるとよく名前を聞く大学だと思います。でも、海外にそれほど名が知れ渡ったという大学じゃないですね。慶應義塾大学は国際化というものが遅れている、という認識が我々教員にはあります。最近、焦って、英語だけのコースとか、全部英語で受けられるコースとか、ダブルディグリーとか、そういういろいろなものを矢継ぎ早に打ち出しているんですけども、遅れています。

早稲田大学がライバルなんです、慶應は。ですけど、その早稲田からは大分遅れているかなという気はします。例えば早稲田にはグローバル教育センターというものがあります。慶應はありません。国際センターという留学とかいろんなことをやるところはありますけど。各学部がそれぞれ、私は経済学部ですけど、経済学部はオール英語で９月入学というコースが３、４年前にやっとできて、いろいろ見切り発車したので、混乱が結構あるんですけど、それをみんなで、教員と事務方が頑張って乗り越えていこうとしているようなところです。

キャンパス（学部など）と書きました。いろんなキャンパスがありますけども、東京と、日吉というのは神奈川で、私がいるのはこの日吉ですけども、学部は文学部、経済学部、法学部、商学部、あとは理工学部、医学部もあります。

あと、湘南藤沢といいますけど、このキャンパスには領域横断系というんですかね、総合政策・文系寄り、環境情報・理系寄りというのと、あと、看護医療ですね、看護師さんなどが通うところがあります。

芝共立というのは、共立薬科大学というのが昔あったんですよね。その薬科大学を買いました、慶應が。で、一キャンパスになったものです。

総合大学で、全部で数万人、学生さんがいるという感じです。数万人の学生さんがいらっしゃるんですけど、このうち、第二外国語としてスペイン語の授業を実施しているのは、文学部、経済学部、法学部、商学部の４学部です。これに加えて、SFC、湘南藤沢のキャンパスです。４学部と１キャンパスみたいなことですね。

履修者は、今回、正確な数字はお伝えできないんですが、ざっくり申し上げますと、恐らく 1,000 人に行かないぐらいではないかと思います、スペイン語の履修者だけで。ほかのドイツ語、フランス語も、特にフランス語ですね、あと中国語は同じぐらいいると思います。それぞれ 1,000 人ぐらいずつなんじゃないかなと思います、多分。正確な数字は不明なんですが。

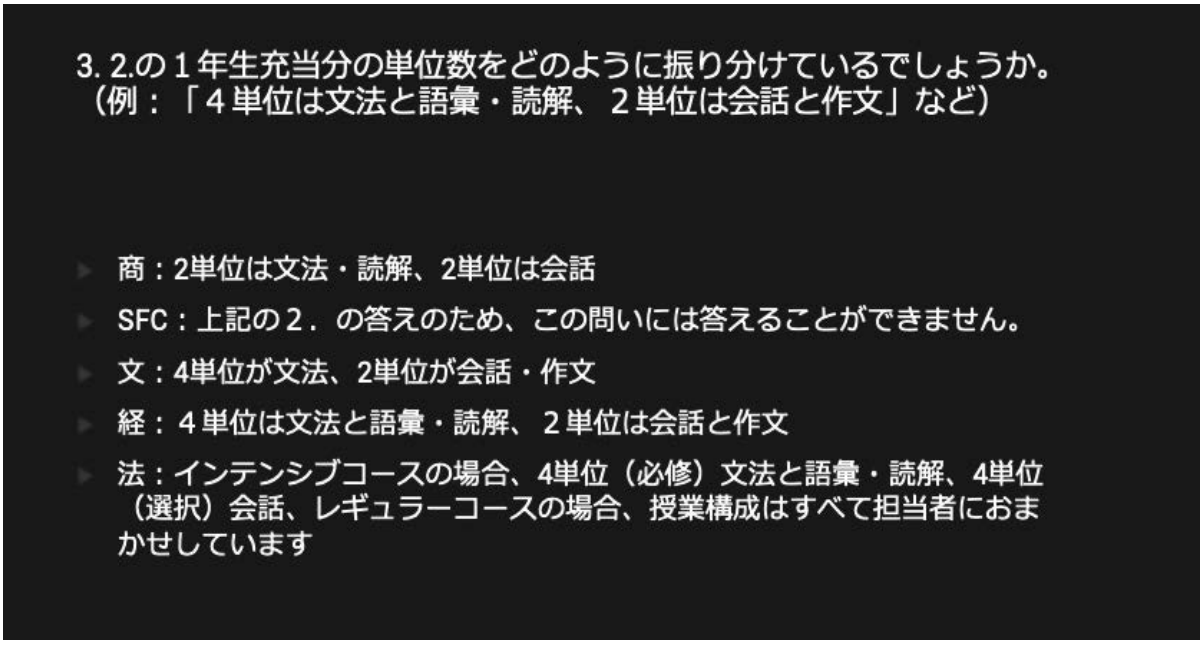
スペイン語教育の概況です。先ほど申し上げたとおり、文、経、法、商と湘南藤沢の２学部で第二外国語としてはやっております。ここがすごいなと思うんです、専任教員数が 22 名います、スペイン語だけで、すごいことです。うち、テニュアというのは任期なしということですけども、18 名です。4 人の方が任期ありで、でも、常勤、フルタイムで来ていただいています。結構大きな団体になっていますね。22 人といったら、例えば、私が出身の上智のイスパニア語学科、スペイン語学科の専任教員は 7 名とか 8 名とかなんですよね。それの端的に３倍とかいるわけなので、すごい人数だなと思います。あらためて思いました、今回カウントしてみて。

その 22 名、各学部ですね。私は経済学部なので、経済学部の情報をここで提供しますけども、それ以外の文学部、法学部、商学部とあと SFC、湘南藤沢キャンパスのそれぞれ先生お一方にアンケートを取って、どうなっているんですかというお伺いをちょっと立ててみました。多分これ、22 人も先生がいて、今までやったのは誰もいないと思います。私が今回初めて。個人レベルでうちはこんなですよという情報交換はしていると思いますけど、今時点でこうなっていますというのを学部横断で見ようとした人というのは、あまりこれまでいないんじゃないかという気がします。それを、ましてこういうところでお話しするという機会はなかったんじゃないかなと思います。

これ以降はアンケートに入っていきますけど、まず、選択必修科目、第二外国語としてのスペイン語は何単位か。8 単位か 10 単位です、どこの学部も。文学部は 10 単位が多いですね、やっぱり。それ以外のところでも 8 単位ですね。それを１年間、２年間かけて取るわけです、10 単位、8 単位を。そのうち１年生でやるのは、商学部と法学部は 4 単位、半分１年生で、残りの半分を２年生でということですね。経済と文学に関しては 6 単位なので、半分ちょいを１年生のときにやると。

SFC なんですけど、ここは面白いんですよね。１年生の科目というものが存在しないので、理論上ですけど、１年

スライド３



生のとき語学を取っていないという人がいるわけですよね。２年、３年生でまとめてやりますとか、もしくは１年生のときに 8 単位全部取っちゃうとか、２年生で取っちゃうとか、１、２、３年生で分けるとか、とにかく３年生までに 8 単位取得する、ということらしいので、その辺りは自由度が大きいです。

SFC は何にしても、とても自由度が大きいです。縛りがない感じがします。本当に三田、日吉という昔からあるキャンパスで働いている教員、私みたいなものからすると、何か本当に別の大学みたいだなという感じがします。これはみんな、ほかの同じキャンパスで働いている人たちも言っています。

次は単位です。必修の単位を、どういう分野でやっていますかというお話です。例えば、例としてここに挙げておきましたけども、4 単位は文法とボキャブラリーと読解で、2 単位は会話と作文みたいな割り振りを、１年生の 4 単位ないしは 6 単位あるとすれば、それをどのように割り振っていますかというのが私、気になったので、ちょっと聞きました（スライド３）。そしたら、商学部は、4 単位のうち 2 単位が文法・読解、週１回だと思います。週１回、文法と読解で 2 単位、週２クラスあって、文法と会話みたいなことですね。

SFC は、もうそもそも１年生クラスがないので回答できませんと。文学部は 4 単位が文法、2 単位が会話・作文、私がいる経済学部では、4 単位が文法と語彙・読解、2 単位は会話と作文で、文学部と経済学部は同じです。

法学部はインテンシブコースというのがありまして、普通のコースとインテンシブコースと２つあります。インテンシブコースの場合は 4 単位、文法と語彙読解で、4 単位、会話ですね。レギュラーコースの場合は決めていないと。

例えば経済学部だったら、文法をここまでやってくださいということはお願いしています。スペイン語でいうと、スペイン語でというか、スペイン語の文法の用語でいうと接続法の過去完了までやってくださいと。非現実的仮定文というんですかね、「もし私があのとき大学をやめていなかったら今頃こんな感じだっただろうに」とか、そういうやつですね、あの文章までつくれるようにしてくださいと、１年生だけでというお願いをしています。あとは、教科書選定とかはもう皆さんにお任せしていると。

法学部はそれすらやっていないということだそうです、本当に自由にやってくださいと。多分、でも文法の縛りは多少あったような気がします。自分も以前非常勤として法学部の授業を担当していましたので、そのときにあったような気がするんですけど、でも、そんなに縛りはきつくな

いと。

じゃあ、教科書統一したりしていますかということですよね。これも、私、気になったので。というのは、商学部は教科書統一していますというのを知っていたんで、ほかの学部がどうなんだろうなと思って聞いてみたんです。そうしたら、商学部が使っている *Español en imágenes*、『イメージ・スペイン語』ですね。文学部でも同じものを使っていますよと。あと、湘南藤沢キャンパスだと統一していて、Difusión という有名な教科書の会社ですけど、この教科書を使って統一している。経済学部、法学部は統一していないという感じです。

文法事項は接続法までということなので、そこだけ決めておいて、接続法も多分、過去完了はやっていないんだと思います。

次に行くと、中間・期末テストは統一して実施していますかということです。今回の講演を主催されているプロジェクトが学修効果測定に関することということなので、それを何かしているのかというのはもちろんあるわけですけども、それを含めて、統一テストをやっていますか、教科書統一をしていますかというものをお尋ねしたのですけども、そのテストを統一しているのも、やっぱり商学部はしている、文学部もしている。SFC は、そもそも専任が１人しかいない、訪問講師というのは任期つきのフルタイムの人ですけど、１人しかいないし、全てのレベルが１クラスの設定で、要は同じだということです、統一していますということです。だから、私のいる経済学部と法学部が何か教科書も統一していなければ、テストも統一していないし、ああ、いいのだろうかというギルティーな感じがだんだん調べていくうちにしてきたのですけど、こういう結果になっております。

だから、捕捉しようと思えばできるはずです、データはたまっているはずです。毎年どの教科書でどういう統一テストをやって、平均点が何点で、得点分布はこういう感じでというデータは恐らく出そうと思えば出せる。これに関しては聞いていないのですけど、そこまでは多分やっていないんじゃないかと思います。でも、統一していると。

これはアンケートじゃなくて前に聞いたことですけど、そもそも何で統一するんですかという、統一テストをやるんですかと聞いたときに、要するに不公平だと。担当者によって教科書に差がある、テストの難易度に差があるということが当然、担当者にお任せすると、それがどうしても出てきてしまうので、そうすると不公平だという学生さん側からのフィードバックがちょこちょこあったと。それは確かにそうなるだろうなというふうに思いますので、統一テストでやるようにしたということで伺っています。

文学部もちなみに、専任の先生はお一方しかいないです、文学部なのに。経済学部は７人います、びっくりです。最初、ゼロだったんです。最初、ゼロだったのが、ここ 20 年ぐらいで７人という、急成長しておりますけども。

次、行くと、じゃあ、中間・期末統一している、していないという話以外に、DELE とか、DELE というのはディプロマですね。さっきのセルバンテス協会というところがやっている、スペイン語のテストです。A1・2、B1・2、C1・2 のやつですね。あとはスペイン語検定という、日本語で受けられるスペイン語の検定試験がありますけど、それも受けさせたりしていますかとか、それで点数は何点と聞いたりしていますかというふうに聞いてみましたけども、どこもやっていないと。

やっていないんだけれども、やる気のある学生は受けますね、やっぱり勝手に。勝手に受けますし、受けたら教えてくれます、大体。これは法学部の先生から、学生側から報告を受けることが多いですと書いていますけども、大体受けたいという人は教員のところに言いに来るんですよね、どうやって勉強したらいいですかということを。それを聞いて、教えるわけですよね、この教科書がいいよとか、そういう話をするわけですね。それで、受かったら、というか、受かっても受からなくても教えてねとかという話になるので、ある程度捕捉はしているだろうと思います。でも、全体からするとそんなに多くはないですし、特に経済学部なんか専任７名で、非常勤の方を入れるともう 20 人ぐらいになりますので、DELE などの検定試験を受けたいという人はそれぞれの先生のところに行くわけなので、全体は把握し切れていないという状況です。

ここ５年間の履修者数を見ると、オリジナルデータは非公開なのですが、文学部だけ減っているんです、なぜか。これは面白いことだと思います。私、個人的に文学部の歴

史ですね、西洋史専修というのがあって、そこにスペイン現代史を教えに行っています、1年おきに。それで聞くと、非常にスペイン語圏、スペインもそうだし、ラテンアメリカもそうだし、興味のある学生さんはいっぱいいて、自分で熱心に勉強したりします。スペイン憲法の序文が空で言えるとか、そういう人もいたりします。びっくりします。でも、文学部全体としてはスペイン語履修者は減っているそうです。顕著に減っているんですね。激減していると言ってもいいぐらいだと思います、私が見るに。ですけど、そのほかのところはそうでもないんですね、高止まりしている状態です。

経済学部、法学部、商学部はスペイン語が高くて、それ以外が食い合いをしているような状況です。ただ、見ていると、スペイン語がちょこっとでも減るときは、フランス語が増えていますね、何か。だから、スペイン語とフランス語の間、どっちかという選択と、ドイツ語を選択する学生さんは何か理由があって、やっぱりサッカーという人も多いですけども、だけじゃなくて、いろんな、クラシック音楽が好きとか、そういった理由もあると思いますけど、それでドイツ語をやりたいという人が多いと。ただ、第1希望でドイツ語を選ぶ人は実は少なくなってきている、残念ながら。

中国語は、日本にいますと、特に男子が多いと思います。男の子は、児童文学に「三国志」とかそういうのがあったりしますから、それで、そういうところで興味をかき立てられて、そのまま中国語、中国文学というものに興味を持つとか、映画もたくさん見られますし。ただ、中国は、日本と中国の関係です。日中関係が悪くなると、中国語の履修者は減ります。これは、これは慶應もそうですけど、早稲田もそうです。あと、いろんな大学の担当者の方に聞いても同じことをおっしゃいます。

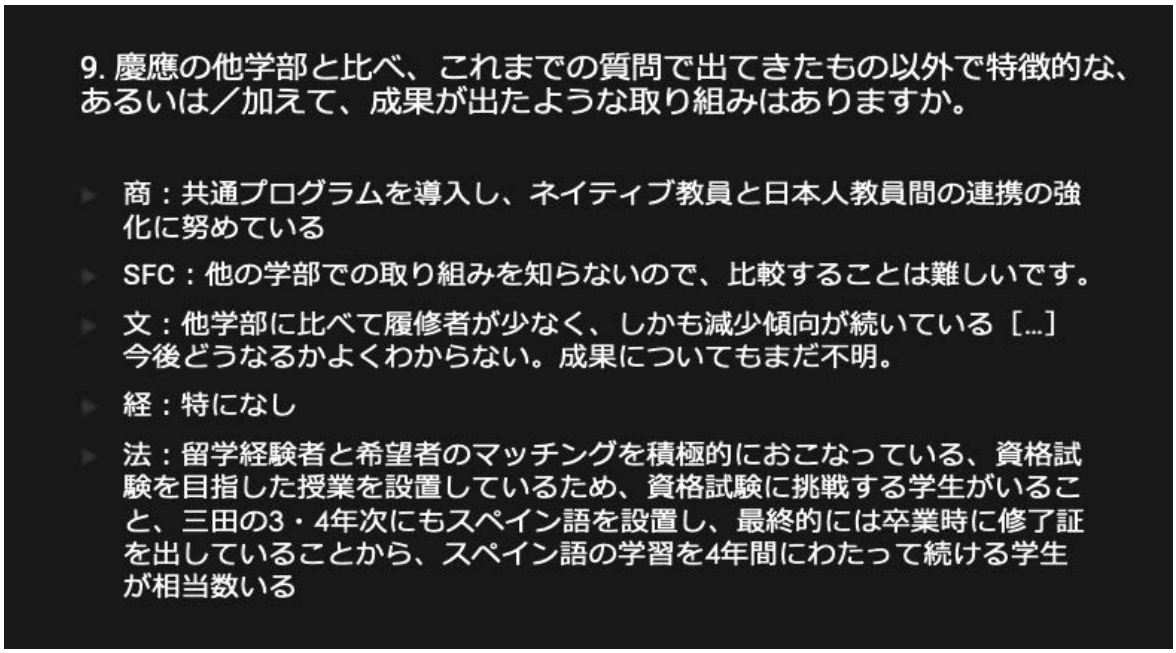
慶應の経済学部では第二外国語としては韓国語がないんですけど、第三外国語はあります。韓国語の先生もいらして、韓国語の担当の方に聞いても同じだそうです。やっぱり、日韓関係がよくなくなると少し減ると。減るのは男性だそうです。なぜかというと、韓国のポップカルチャー、ドラマとか、歌とか、そういうのを消費する主たる層というのは女性だからという、底堅い需要があるんだそうです。でも、そうじゃなくて、男のほうは二国間関係で見るんですかね、分からないですけど。男子が減ったり増えたりするというようなことらしいです。

でも、スペイン語は分からないんですよね。大陸の端と端の国ですから、どういう原因があってか、増えているわけです。ここ十数年増えていて、ここ数年高止まりなわけで。でも、セルバンテス協会の人に聞くと、この先減るだろうとすごい不安そうな顔をして言うんです、みんな。でも、そんな不安そうな顔をして、この先減るだろうなという話をして、もう既に数年たっているんですよ。全然減っていないんですよ、その間。だから、本当に減るのかなという気になってしまいますけども、先ほどの18歳人口が減っているということからすると、減るだろうな、減ることは覚悟しておいたほうがいいだろうなとは思います。でも、分からないんです、スペイン語の履修者がこれまで増えて、その恩恵をもろに被っていますから。スペイン語の履修者ががんと増えていなければ、私、フルタイムで雇用されていないと思うので、慶應で。ぜひとも知りたいと思いますけども、分からないですね。

ごめんなさい、ちょっとそれましたけども、次はクラス数です。同じですね、履修者が増えればクラス数も当然増えますので。ただ、難しいですよね。一旦増えたクラス数を突然減らすというのはなかなか難しいと思うんですよ。要は、例えば非常勤の先生方にお願いをしているクラス、じゃあ、ごめんなさい、来年からなしでというわけにはもちろんいきませんよね。1クラス当たりの人数が減るというのは結構なことだと、良いことだと思うんです、外国語でも、そうでなくても。じゃあ、それだったら1クラスの人数を減らして、クラス数はそのままでいいじゃないかという発想になるのは外国語教員としては分かります。何とか抵抗して、あんまり減らないように、文学部はされているそうです。

次ですが、特色ある、それぞれの学部で、こういう特徴的な試み、取り組みはしていますかということです（スライド4）。商学部は共通プログラムを導入して、ネイティブ教員と日本人教員の間の連携の強化、よくある話ですよね。それはもう特徴的とは言い難いと思うけれども、どの学部のスペイン語教員、どの言語の教員であってもやって

スライド４



いると思います、多分。日本人という言い方、私はしたくないんです、あんまり。日本語話者と言いたいんです、私は。ですけど、日本語ネイティブの教員とスペイン語ネイティブ、カスティーリャ語ネイティブの教員で連携を強めたいというのは、そうですね。

SFC は、そもそも１クラス、いや 50 人なんですよね。そうそう、それを言っていませんでした。履修者数が 50 人なんです、SFC は、湘南藤沢という神奈川県のすごい南のほうにあるキャンパスですけども、スペイン語クラスの倍率がすごい。履修希望者数は増えているわけで、でも、上は 50 人とリミットが決まっていますので、そうすると倍率がどんどんどんどん上がってしまう。そうすると、倍率が高いらしい、スペイン語はと聞くと、人は気になりますよね。それで、相乗効果でまたスペイン語をやってみたいという人が増えているそうですけど、そんなこんななので、そもそも SFC は理想的な、クラス数も少なければ、１クラス当たりの人数も少ない。

スペイン語研修室というのがあるんです。曜日、時間は決めていると思いますけど、そこに専任教員が常駐している。そこへ行ったらネイティブの先生もいらして、自由に話をすることができるという空間も用意されているらしくて、すばらしいなと思います。文、経、法、商ではそれはないです。他の学部ではありません。

文学部は、履修者は少なく減少傾向が続いている。今後どうなるかよく分からない。成果についてもまだ不明と。何かとても不安そうな回答です。

私たち経済学部は、特徴的というのはないです。よく言えば、皆さん自由にやってくださいということではありますけど、そうすると、さっき言った不公平感というのが出てきちゃうので、難しいと思います。

法学部ですけども、これは面白いなと思いました、留学とつなげたいと。留学経験者と希望者のマッチングを積極的に行なって、留学したいんだけれども経験者のお話を聞きたい、という学生に経験者を紹介してあげていると。確かに法学部は留学する人が多いです、スペイン語圏、主にスペインですけども。なので、そこがうまくいっているんだろうなという気がします。資格試験を目指した授業を設置、そうなんです、DELE に特化したクラスがあるんです。そこもいいなと思いました。

あと、さっきのキャンパスの話。私がいる日吉というのは教養教育のキャンパスなんですけども、三田というのは専門科目のキャンパスです。専門科目の三田キャンパスのほうにもスペイン語科目は設置していると。３、４年生になったらみんな三田に行っちゃいますので、でも、三田に

いながらまだスペイン語の勉強を続けたいという人は勉強できるという環境で、法学部は法学部で非常に頑張っているなと。そういうところは、制度的なというか、仕組みの整えるところは整えているなという感じはします。

そうそう、スペイン語の学習を大学４年間ずっと続けるという学生が相当数います。これは私も非常勤やっていたから、そのイメージありますけども、ですし、交換留学の枠を取っていくのは大体法学部の学生だったりしますし、交換留学じゃなくても私費で行きたいという人もいます、結構、行く人もいます。法学部はいい感じだと思います。

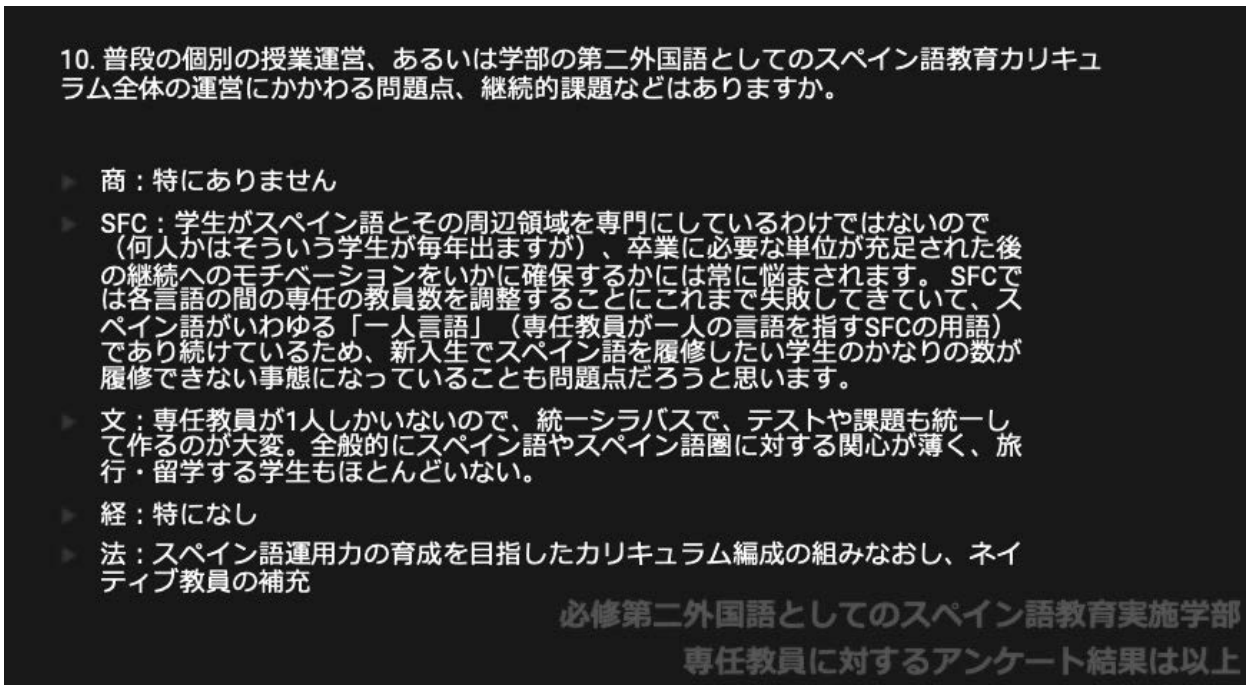
課題ですね（スライド５）。商学部と私の経済学部は特になしとしました。文学部は専任教員が 1 人しかいない。SFC は、学生がスペイン語とその周辺領域を専門にしているわけではない。だから、卒業に必要な単位が充足された後の継続へのモチベーション、だから、法学部はその辺りで留学というのを積極的に取り組んでカバーしているんだと思います。経済学部はスペイン語の専任はゼロから 7 に増えましたけども、SFC はずっと 1 なんです、この間。これを答えていただいた先生は数年前に着任された方ですが、その前の方もおっしゃっていました、増えないんだよねと。

あと、法学部は、運用力の育成を目指したカリキュラム編成、これはいいですね。

あと、インテンシブコースというのがありまして、これ、単位数が多いんですよね。法学部だったらたしか 12 単位か 14 単位だったと思いますけども、これを履修すれば、インテンシブコースを履修しましたよというお免状、ディプロマみたいなものを出しているようです。それは法学部と文学部、法学部はインテンシブコース修了証みたいなのを出しているといったかな。

それは１年生のときにもう選ばないといけないんですね、インテンシブコースに入りたいと。途中からインテンシブコースに入りたい学生も、確か行けたと思いますけど、基本的には１年生でインテンシブにしますか、それともレギュラーにしますかというのを選ばなきゃいけない。それで、そこでインテンシブコースを選ぶ学生さんは、やる気のある学生さんですね。ただ、授業の負荷は、教員の仕事は増えると思いますけども、でも、そういうやる気のある学生だけを集められるというのは、一つよいのかもしれない。

スライド５



３．複言語・複文化教育の試み

あと、複言語・複文化教育というのが昨今の外国語教育でよく言われるところですよね。複言語能力・複文化能力の育成ということが言われるわけです。まず、英語だけじゃというとこですね、困るよねと。英語だけじゃなくて、もう１言語。もっと言うと、もう１言語というのは大体欧米系ですよね、普通、フランス、スペイン、ドイツ。多少似てはいるので、できれば、そうではない第三外国語、第四外国語までやるのが望ましいみたいなことになっていると思います、最近。

じゃあ、慶應でどういう試みをやっているかというと、第三外国語は全学部であります（スライド６）。それは、要は外国語の卒業に必要な単位として認めますということをやっていますし、あとは、ただ、履修希望者は多くないんですね、あんまり。

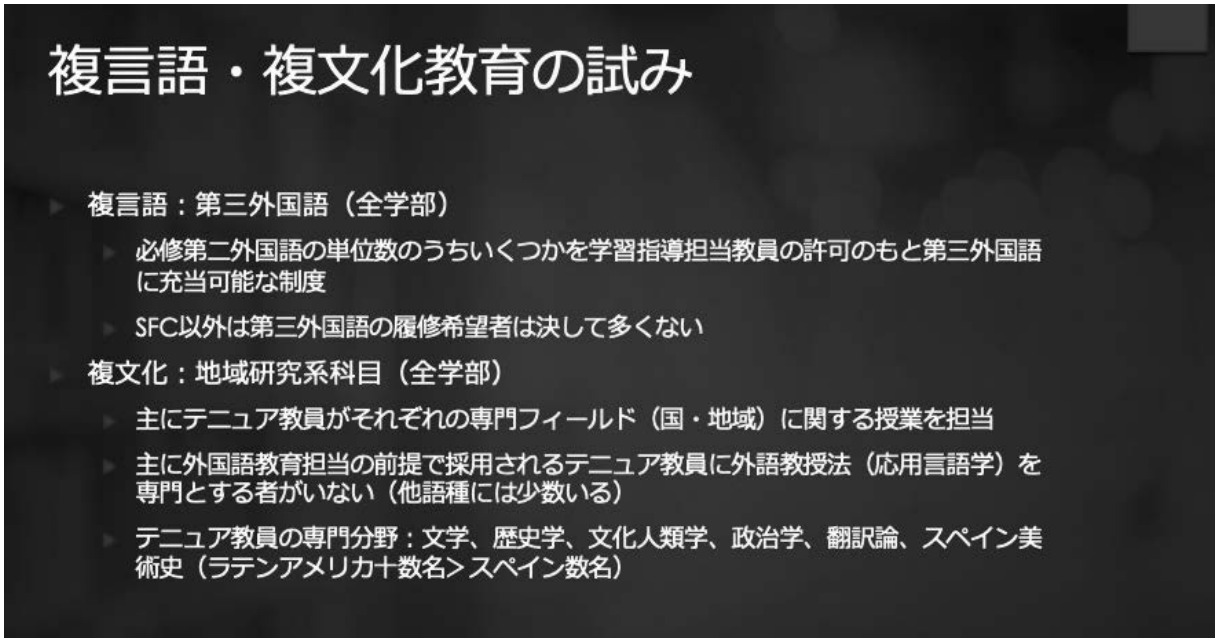
経済学部だと、例えばイタリアの大学と協定を結んでいたりしますので、イタリア語科目は用意しています。それで、それを第三外国語として認めていたと思います、確か。あとは、ロシア語、韓国語だったかな、たしか、だったと思います、は認めています。そこにアジアの言語が１つ入っているということに意味があると思います、やっぱり、しかも韓国語というのは。ただ、履修希望者はあんまり多くはないと。そんな第三外国語の制度は一応あります。

あと、これですね、ここがさっきの私の冒頭にしたお話と非常に関係しますけど、地域研究系科目がいっぱいあります。それもカリキュラム上は関連していないんです。だけれども、例えばスペイン語をやりました、スペインの歴史について知りたいという人がいれば、その科目が用意されているという体制を各学部それぞれで整えています。これは全学部共通です。

ということは、テニュア教員という、専任教員がそれぞれの専門、私だったらスペインで、分野もそうですね、私だったら現代史になりますけども、それに関する授業を担当しています。ただ、専門分野を見ると、文学だったり歴史、文化人類学、政治学、翻訳論、スペイン美術史等々とありますけども、ここに外語教育法をやっている先生はいないんですよ。任期つきで一時的に来ていただいたことはあります、過去に。なのですけど、いないんです、今まで。私、これはちょっと課題だな、課題というか、問題だなと思うんです。これだけ人数も増えていて、時代も変わっていて、何せ外語教授法という研究分野が発展をしてきているのに、その研究分野の最新の研究成果を我々のスペイン語教育に反映させられる人がいないということなので、それはよくないなと。よくないというか、いたほうがいいよねというふうには思います。

でも、それが何でいないんだろうということでいうと、

スライド６



要は、この地域研究系科目を持ってねという。私だったらスペイン語を５コマ担当します。もう１コマ、地域研究系科目を担当しますということで採用しているんです。なので、何か語学を教えて、かつ自分の語学以外の専門を持っている人を取るという方針に伝統的にはなっているわけですね。これはスペイン語だけじゃないんじゃないかという気がする。主に、でも、文学だと思いますけども、そういう傾向があるように思います。それが結局、そもそも外語教授法をやろうという人が少ないということにもなるだろうし、そうすると先生も育たない、全体の数が減るということになる気はするので。

でも、伝統的な問題ですよね。その言語をやります、地域研究の科目も履修します。言語と文化、あるいは社会、ここで生きる人々について総合的に学びましょうというのは、それは伝統的なモデルだし、それは必要だと思います。それこそ複文化教育だと思いますけども、他方で、何ていうんですかね、隙間というか、時空のゆがみじゃないですけど、そういうところに吸い込まれたかのように、外国語教育をやる人を採用していないということですね。いるんですよ、外国語教育、スペイン語教育法を専門にしている先生方はたくさんいます。そういう先生方は実は SFC、湘南藤沢キャンパスにたくさん、非常勤でいらっしゃいますけども、そういう人たちの知見をうまく生かせるような仕組みがないといけないんじゃないかなと、あったほうがいいなという気が私は個人的にはしています。ほかの先生とこういう話はあんまり実はしないんです。

留学の話が出ましたので、慶應大学の体制として、こういうところが協定先でありますが、御覧いただくと分かりますよね。スペインが 5 校、ラテンアメリカは 2 校しかないんですよ。これはちょっとおかしいと思います、私は。なぜかというと、スペイン語圏の人口は 5 億人いるわけです。そのうちスペインは 10 分の 1 以下なんですよ。ということは、それは比例させたほうがいんじゃないかと思うわけです、私は。ラテンアメリカ、いい大学がいっぱいあるのに、協定を結べばいいのにと思うんですよね。

例えばペルーとかチリとか、経済成長もしていて、大体学生さんは治安のよさというのを気にしますから、留学先を選ぶ理由として。今、治安が、劇的に改善したかどうか分かりませんけども、行きやすくなっていると思います、ペルーにしても、チリにしても、もう既にあるアルゼンチンにしても。メキシコも協定校を増やしてもいいんじゃないかと思いますし、そもそも 22 人もいるテニュアの専任の先生で、ラテンアメリカの専門の方が十数名なんです。多いんです、スペイン専門が。私を含めて 10 人弱ぐらいの感じなんですよね。それも反映したほうがいいんじゃないかというのは思うところではあります。

あと、ESADE ビジネススクールと、このポンペウ・ファブラ、これはバルセロナにあるとこですけど、この 2 校は私学ですね。スペインの国立大学は、例えば私、今、大学院に行っていますけど、学費が年間８万円とかなんですよ。全部、事務手数料から何から含めてです。でも、私学に行くともう数百万円という世界になっちゃうんですね。だから、そこの差は非常に極端なんです。

この ESADE は、世界トップクラスのビジネススクールなんですね。ここに行って学位を取ってきたなんていうと、結構就職活動が多分有利になるようなとこなんですよね、そういうところはあります。ポンペウ・ファブラなんかは、スペインで一番、マドリードのコンプルテンセという大学があるんですけど、そこを抜いて、もう事実上トップに立っている大学ですね。

というところはあるんですけど、ラ米でね、しかもメキシコはモンテレイ工科大学という、そこへ行くかという感じですよね、何かね。もっといい、国立自治大学とかあるんですけど、そこは協定校ではないんですよね、まだ。

ちょっと長くしゃべっちゃっているので、そろそろ終わりにしますけども、最近の変化として、履修者が減っていますよという話と、あと、教科書と期末テストを統一しているというのはごく最近の話で、ここ数年の話です。

あと、先ほどから何回も言っていますけども、外語教授法を専門としている、あるいは訓練を受けている。別にいいんです、専門としなくても。少なくとも、でも、教員としての訓練を受けている人、私は受けていないです。今ちょうどワークショップをやってくれているので、それには出ていますけど、関心の高い教員というのがそんなにいないんです。でも、SFC にはそういう人たちが、非常勤か任期付常勤でたくさん来ていらっしゃるということはあり

ます。昔はそういう方々すらいなかった。

インテンシブコースが導入されたことと、あと、高大連携ですね、これは最近よく外国語教育で聞きますけども、高校でスペイン語を履修できるんですね。それは慶應の系列校ですね、慶應義塾高校とか、この間、甲子園で優勝したあれです。あと、ニューヨークにも高校を持っているんですけど、そことか、さっきの湘南藤沢は高校も抱えているんですけど、そこにもスペイン語コースはあります。そこでスペイン語の初級、ほんのさわりですけど、やってきて、既修者として大学で多少レベルの高いコースに行くか、インテンシブに行くかというふうにしてみています。

それが例えば、法学部は多分フォローしているんだと思いますが、ある程度、その後の留学につながったり、あるいはスペイン語に関わる仕事に就きたいと、スペイン語関係就職というところまで行っているのかどうかというとこですね。そこは調べていないと思います。個人的に報告を受けたレベルのことだと思うので、そこをちゃんとトレースして、やったほうがいいのではないかと思います。

ただ、やったほうがいいといって、じゃあ、誰がやるんですかという話なんですよ。大変ですから、そんなことをし出すと。大変面倒くさい話ではあると思うんですけども、22 人もいますから、やってもいいんじゃないかなという気はします。

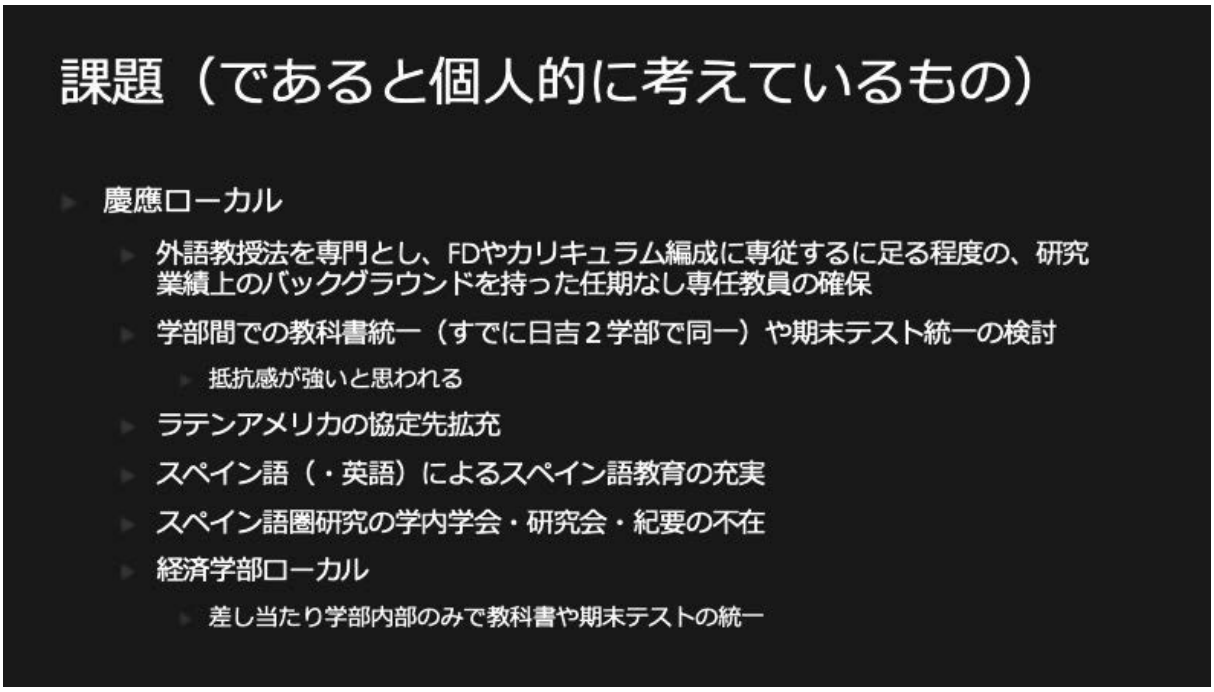
あと、さっき申し上げた、特にラテンアメリカとの大学協定を増やしたほうがいんじゃないかということです。

４．外国語教育の課題

課題です（スライド７）。これは私が個人的に課題と考えていることですけど、何回も言うように、外語教授法を専門にしている人を採ったほうがいいんじゃないかということと、試験を統一したほうがいいよね、教科書を統一したほうがいいよねと。ただ、これ、抵抗感が強いと思われると書いちゃっていますけども、誰が抵抗感を持つかといったら、専任の教員が抵抗感を持つと思うんです、きっと。何でかといったら、自由度がないという言い方を、私、それしないんですかと聞いたこともあるんです、周りの先生方に。自由度が奪われるというようなことをやっぱりおっしゃいますね。

難しいですね、何の自由を指しているのかというところはあると思いますけれども、教科書を統一しちゃうと、それぞれの先生の個性だとかキャラクターというのが何か薄れてしまうんじゃないかとかということを心配されて

スライド７



いるのかもしれない。そんなことはないと思うんですよね。むしろ同じ教科書を使っているからこそ、それぞれの先生でこんな扱い方が違うとかということも出てくる気はします。

しかも、経済学部でいうと、入学するときにもうスペイン語を履修すると決まっていますので、かつ、どの先生のクラスに行くかというのは決まっていないです、でも。それはもう自動的に割り振られるわけですので、そこは学生さんにはあんまり関係のある話ではないのかもしれないですけど、でも、教科書統一するぐらいはしてもいいんじゃないか。でも、教科書統一したら多分、試験を統一しようという話になると思うので、そうすると、何か事務的な負担が非常にまた増えるというのもあると思うんです。それが本音なんじゃないかなと思いますけれども、事務負担が増えるのが嫌だと。

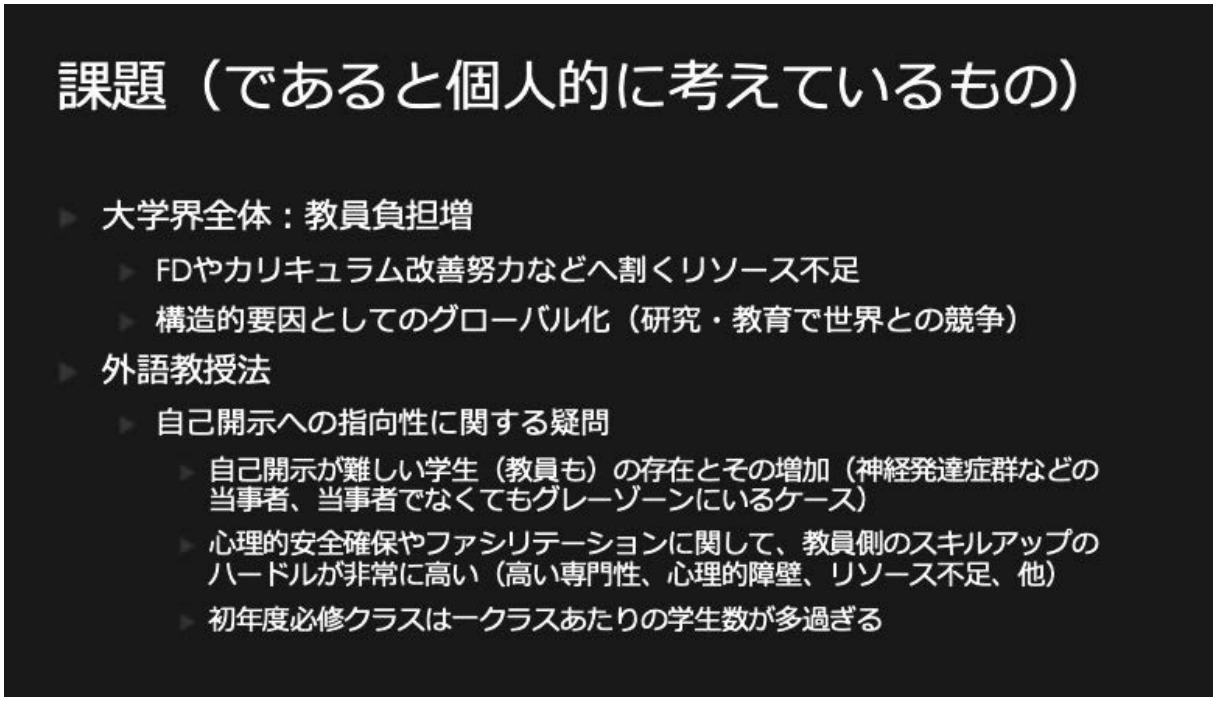
あとは、協定先拡充。それから、スペイン語（・英語）によるスペイン語教育ができるようになるといいよねというところはありますね。

あと、そうそうそう、これだけ専任教員が 18 人とか 22 人とかいるのに、学内の学会みたいなのもないんですよね。研究会もない。それは分野がバラバラだからなんですけど、文学、歴史、歴史といっても、近世メキシコ史とかやっている人と、私みたいにスペイン現代史をやっている人、あと、キューバの文化人類学とか、カタルーニャ 19 世紀の歴史とかをやっている、いろんな人たちが集まって、同じスペイン語圏であるというだけで何か意味のあるというか、そういう学会をつくれるのか、研究会をつくれるのだろうかというところは難しいかもしれないと思いますけど、でも、あってもいいんじゃないかとは思いますね。

経済学部で教科書・期末テスト統一したいというのは私の思いです。したいというか、したほうがいいんだろうなというところです。

あと、さっきから事務負担がどうという愚痴を言っていますけども、増えてもいいんです、別に。多少増えてもいいのだけれど、何でそれを嫌がるかというと、既に大変であると。ファカルティー・ディベロップメントとかカリキュラム改善努力をしたい、それはそうです、教員であれば誰でも思っていると思います。けど、そこに割く教員側の、だから、体力とか気力とか、そういったものがちょっと厳しいんじゃないかと思います。それは要因としてあって、グローバル化というものがあって、しかもグローバル化はもう我々どうしようもないことですよね（スライド８）。

スライド８



だけども、例えば私だったら、今、スペインで博士論文を書いています。スペインの民主化について博士論文を書いていますけども、それで、スペイン語で書いて、スペインの現代史研究者たちを相手にしなくてはいけない。あるいは、英語でスペイン現代史研究をしている人たちを相手に研究上の競争をしなくてはいけないということがあるわけです、大変なんです。教育にしても、例えばオール英語プログラムをつくろうといったりすると、教育で何か変えようとすると、それはまた事務負担が既に増えているんですね。

例えば経済学部だったら、オール英語プログラムをつくりましたというときにぐちゃぐちゃだったという話をしちゃいましたけども、ぐちゃぐちゃなのも訳があって、人と時間とお金をちゃんと貼りつけなきゃいけないのに、足りていない状態で、でも、進めなくてはいけないという事情があったわけですので、そうなってしまった。でも、もう取りあえずスタートはした。そこから部分的な補修を、パッチを当てることをしていって、何とか頑張っているということです。それはコストというか、維持する手間暇も当然かかるわけです。

という構造的な問題があるので難しいよねということと、あと、二つ目として書きましたけど（スライド８）、外語教授法を専門にしている人がいないということですよね。専門にしている人が取りあえずいないんだったら、今いる人間だけでも頑張らなきゃいけないんじゃないかとは思います。私はスペイン現代史を専門にしているけども、スペイン語を教えているのだから、それでお給料をもらっていますし、私なんか本まで出しちゃっているので、それは義務として。でも、自分の興味としても、もちろんそういう外語教授法で訓練を受けようとはしていますけれども、それも人によって違います、やっぱり。興味の幅というか、スペイン語教員としてのアイデンティティーを強く持っている人、持っていない人、いると思います、多分。

あと、そもそも研究と教育、どっちに軸足があるかとか。私は両方頑張ろうと思っていますけども、研究だけしていればいいという人はやっぱりいます。そういう人に限って、やっぱりすごい研究をされるんです。それはそれで評価すべきことなんです、もちろん。だけども、その人に、じゃあといって、無理やりスペイン語教員として訓練を受けなさいと言って、そういう仕事をぐいっとやらせるというのはどうかと思うんです、私は。難しいと思います、そこは。そこを何か無理やりするというのは非常に、それはそれで問題だと思います。でも、やっぱり必要だとは思います。スペイン語教員としての訓練を受けている人が必要だと思います。

あと、でも、そもそも外語教授法というのは専門なわけですよ、一つの。専門ということは、教員として訓練を受けることもそうだけれども、それは時間かかるよねと、簡単じゃないよねということはあると思います。それは大変だなと思います。

あと、外語教授法に関して最近持っている私の疑問ですけど、心理的に安全な教室ということに関してです（スライド８）。それは確かに絶対に必要なことです。なぜかというと、自己開示をする、自分の感情だとか考えを表現するに当たって、ここは安全な場所だという思いがないとできません。ただ、心理的安全を確保するために教員が知っているべきことというのは結構多いと思います。これはあまり、他のスペイン語の教授法の専門の人に聞いてもピンとこない方が多いんですけど、心理的安全って何ですかとか、そもそも。

要は、心理学に関する知識が結構要るんじゃないかなと私個人は思っていて、それと、学生に対してそもそも自己開示を求めていいのだろうかと。できない人がいます。それは、学生側だけではなくて、教員側にもいます。教員側にも、ここに書きましたけど、神経発達症というのはいわゆる発達障害ですね、を持っている教員がいたりするというケースも聞きますので、当然、発達障害の認定を医者から受けていなくても、グレーゾーンという人たちもたくさんいます。私、自分がそうなんじゃないかと思っている部分もありますけど、単純にシャイな性格な人もいますよね。そういう人に、必修の外国語という場で自己開示を迫るというのは結構危ないんじゃないかという気は実はしていて、だからこそ、ちゃんと訓練を受けて、安全を確保した上で、自己開示したければどうぞというぐらいにしておかないとまずい。でも、それをするためには、やっぱり教員

としての訓練、プラスその教員としての訓練の中に心理学的な知識というものを結構ちゃんと入れておかないと難しいだろうなという気はしています。

あと、グループファシリテーションスキルといって、私、こんなに喋ってしまっていますけど、喋るのが好きなので、喋ろうと思えば幾らでもしゃべれますけど、喋らせるスキルというか、それも必要ですよね。どういうふうにしたら学生は喋りやすくなるのかとか、そういうことのスキルがちゃんとあるわけで、そういう訓練は必要ですよね。

でも、訓練受けるにはリソース不足だし、そもそも、学生数、1クラスが経済学部だと35なんです。マックス35で、十何クラスあるんですけど、多いですよ、やっぱり。仮に35人だったとして、5人のグループが7グループできます。90分の枠の中で、そのグループの中でグループワークをやらせます、そういうやり方もできますけども、全体に目を行き渡らすのは難しいですよね、私、やってみたこともありますけど。そもそも1クラスの人数を減らせないかとか、でも、そうすると、たくさんの先生に来ていただかなくてはいけないわけですし、もしくは教員が持ちコマを増やすとかそういうこと、そうすると教員の授業担当が増える。そうすると余計何か、FDとか自分の研究とかに割くリソースは減るということで、そこの壁にやっぱりぶつかる気がするんですよね。なので、グローバル化というところがどうしようかというところでは変わらないんだと思いますけども、というようなことが課題だというふうに思っております。

取りあえず，以上で終わらせていただきたいと思います。ありがとうございました。

小林（教養教育センター長）：御講演のほう、ありがとうございました。そうしましたら、質疑応答等をよろしいでしょうか。

加藤：はい。

小林：何か質問等、御意見等、お持ちの先生、お名前を言って。

じゃあ、お願いします。

会場発言：教養教育センターの箕輪です。今日は、わざわざこちらまでおいでいただいて、ありがとうございます。

今回の講演の背景にもあるわけですけど、学修効果の測定であるとか、最近、文科省がやたらと言っている教育の質的な保証とかという点についての質問なのですけれども、御講演の中では、組織的に何か学修効果の測定というのを積極的に、今の段階ではまだやられていない。

加藤：やっていないです。

会場発言：ということなんですけれども、例えば、これも言える範囲で全然構わないのですけれども、例えば学内で、語学教育なり、語学だけでなく、恐らく専門科目も全部そうだと思うのですけども、教育の質的保証に関して何らかの形で議論が行われているかどうかということについてはいかがでしょうか。進んでいるのか、それとも、そういったことは、まだ議論に上がっている状況ではないという感じなのでしょうか。

加藤：議論にも上がっていない状況だと思います。個人の雑談レベルでは、言われているねという話はありますし、私個人としては質保証という言い方が当たるのかどうか。要は外国語教育研究ですね、外国語教育という研究分野の成果をもうちょっと取り入れられないかなとは思っているので、ただ、同時に、かつ、今のはやりの外国語教育のやり方みたいなものに意見したいというところももちろんあったりはするのですけど、ということは思います。

でも、議論はほとんどないですね。システマティックにはもちろんやっていないですし、例えば、フランス語、中国語、英語ももちろんそうですけど、雑誌がありますね、まず。紀要がありますし、学会もあります、なんだったら。そういうところでみんなが集まって議論をするというベースがあるわけです、ということは。もしくは成果を1か所で報告しようという。それがスペイン語教員ではないんですよ。よくほかの語種の方から言われますけども、皆さん、自由でいいですねと、もうフリーダムでということを言われるんですけども、まとまりに欠けますね。なので、余計議論がない。スペインに関していうと、スペインは個人主義の国だとか言われますし、そういうことが影響しているのかも分からないですけど、ないです、あんまり。あんまりというか、ほぼゼロです。

会場発言：ありがとうございます。

小林：ありがとうございます。ほかの先生方、何か。

では、私のほうからよろしいですか。教養教育センターの小林と申します。大変興味深い御講演をありがとうございます。

幾つかちょっとお伺いしたいことがありまして、テキストと、あるいはテスト、あとはいわゆる成績ですね、グレーディングのそういう方針とかをある程度統一化させたいという御意見をお聞きしまして、私、実は本学には教養教育センターというのが、全学共通、いわゆる教養教育の実施運営の一応、責任部隊として存在するんですけども、それとは別に、いわゆる高等教育、教学マネジメントとか、エンロールメント・マネジメントとか、そういったのを取り扱う新しい部署ができまして、ちょっとそちらのほうに異動をして、実はそういったことをちょっと業務としていろいろやっておりまして、本学も同一科目の科目、例えば外国語とか英語とかは、例えば同一科目でたくさんのクラスが展開されていると。ただ、語学だけじゃなくて、いわゆる教養科目においてはいろんな科目があって、心理学とか、経済学とか、複数提供されているんですけど、文科省の方針として、テキストとかテストも含めて同一科目同一内容みたいな一応指針が出ているんですね。本学も取組がちょっと遅れているので、その辺もいろいろ調査しながら進めているところで、英語に関しても一応、共通テキストをちょっと考えていまして、全てじゃないんですけど、そういう方向で進めています。

本学、スペイン語、初修外国語、数がやっぱりどうしても少なくて、週１回ですね、今の。なので、ちょっとそこまでいろいろ思いが至らないのが現状で、個人的にまた箕輪先生とお話しいただいて、その辺はいろいろ教えていただければというふうに思っています。

ただ、初修外国語が尻すぼみになっているという状況をやっぱり、放置していてもいけないというふうに思うんですね。それで、先生の御意見にあった、スペイン語だったらスペイン語の、いわゆる外国語の授業だけに閉じるんじゃなくて、例えば、おっしゃったように、現代史のほうに展開していくとか、あとは、何でしたっけ、地域研究系科目とか、要は初修外国語の科目を展開していくという方向性が一つの、何ていうか、生き残りじゃないですけど、方向性の一つかなというふうに思っています。

本学は農学部というのがありまして、そこがメキシコのラパスというところに拠点がありまして、学生も毎年そっちに送りまして、いろいろ実践教育をしているんですけど、そういった方向との絡みで、何とかスペイン語教育に閉じた形じゃなくて、開いていく方向で、初修外国語の生き残りみたいなものの可能性をちょっとこの先考えていければなんていうふうに思っていますので、その辺も含めて、箕輪先生とまたいろいろお話しいただいて、御相談いただければなというふうに思っています。

最後に、先生がおっしゃっていた自己開示に関してなんですけど、私もちょっといろいろ思うところがあって、たまに私も英語教育の学会なんかに出ますと、何人かの先生はこの自己開示に関しての研究をされていたりしているんですよね。それで、特にやはり、何ていうか、いわゆるオーラルコミュニケーションのクラスなんかだと、自分のある程度パーソナルのところを出していったりとか、場合によっては、自分の家族構成に関するような内容に踏み込んで話したりとか、いろいろそういうのはあると思うんですけど、私なんかは実は授業の最初に、一番、オリエンテーションのときに、しゃべりたくないことがあったら、しゃべらないとか、あるいはフェイク、うその家族構成をつくり出して、そこで何か、当たり障りないようにコミュニケーションを取っていくみたいなことを実際に私は言うんですけども、そういった取組というのは何か、先生、されていたりすることありますか。

加藤：そうですね、久しく自己開示を求めるようなタイプの、要はコミュニケーション系の授業を最近やっていないのであれですけど、昔やっていたことは同じことです。

文法の授業でも作文はさせたりしますし、スペイン語に特化した話ですけど、スペイン語は男性名詞、女性名詞があるわけですよね。じゃあ、男性でも女性でもないという自認を持っている人はどうしたらいいかという問題があったりするわけです。もうその言語に、個人情報じゃないですけど、そういったものが埋め込まれていたりするところがあると思っていて、それは割と冒頭というか、男性名

詞、女性名詞というのが文法として初めて登場した時点で言います。

その時に、全く同じです、自分のことを本当のことを言わなくてはいけないということではないと、自分の頭の中でつくり上げたキャラクターの話をしても構わないと。要は、自分で使うことが大事なわけなので。ただ、うそをつかせるのもなんだとは思いますので、だったらもう創作でというような感じになるかと思うんですけど、そう言います。言いたくないことはもちろん言わなくてもよいし、ということ、同じですね、そういう意味で言いますと。

小林：ありがとうございました。

もう一つ質問をよろしいですか。

加藤：どうぞ。

小林：慶應大学さんは、まず、規模が全然本学とはもう本当に違うんですけど、理系の学部の……。

加藤：あります、あります。

小林：学生さんの、例えば受講状況とか、そういったものはいかがですか。

加藤：日吉の隣に矢上キャンパスというのがありまして、この矢上に理工があります。信濃町に医学部がありまして、あと、薬学も看護もありますけども、それぞれで第二外国語があります。特に医学部なんかはもうドイツ語をやるという人が多いですし、第二外国語。でも、フランス語もあったんじゃないかなと思います。必修であったはずです、確か、理工も医学部も。

小林：そうすると、文系学部ほどではないけれども。

加藤：ではないです。多分4単位とかなんじゃないですかね、と思いますけども。

小林：なるほど。

加藤：単位数は圧倒的に少ないし、週１回を２年とか、そういうことだと思うんです、仮に4単位だったとしても。

小林：そうなんですね。

加藤：はい。専任の方がいらっしゃらないですね、理系学部には。スペイン語の専任の方はいらっしゃらないですし、あと、そうだな、理工と医学部、英語の先生はいらっしゃいます、専任で。だけど、第二外国語の専任の方はいらっしゃらないんじゃないかなと思います、多分。医学部、ドイツ語の方がいらしたかな、いらしたかもしれない、みたいなことです。

小林：週１回とかって、結構本学とも似ている状況かなと思ったりして。

加藤：と思います。

小林：またその辺の、多分、御担当の先生の悩みとかいろいろあると思うので、その辺もいつか教えていただけたらと思います。

加藤：そうですね、はい。

小林：よろしくお願いします。

加藤：ありがとうございます。

小林：ありがとうございました。

それでは、もしも御質問がないようでしたら、ここまでにということにさせていただきたいと思います。

先生、最後に何か言い残したことはございませんか。

加藤：そうですね、二外、第二外国語が縮小していくというのは確かにまずいというか、あんまり好ましいことではなく、日本がより開かれた国、地域になるために一番、最前線だと思っていまして、私、第二外国語というのは。英語ももちろんそうですけど、何というのかな、英語は英語で頑張ってもらわないと英語以外が頑張れませんから、英語は英語で頑張ってほしいんですけど、英語以外の言語も学習機会が用意されていないと、ますます。

そもそも日本はマーケットが日本だけで完結してしまいがちということがよく言われますけど、なので、外へ出ていく構造的なインセンティブに乏しい国なんじゃないかと思うんですよね。何というんだろうな、インバウンドでもうちに籠もっていればいいやみたいな感じになってしまうかもしれない。分からないです、そこら辺、適当なことは言えないですけど、でも、やっぱり第二外国語は維持されていくべきだろうなと思います。

それは、外国語も大事です。外国語を、しかも文法も結構大事だと私は思っていて、例えば兄、弟というふうに漢字１文字で言えるけども、例えばスペイン語だったら兄弟ですということしか、年上の兄弟、年下の兄弟ですという言い方をします。そこはあんまり重要じゃないわけですよね。というような、文法事項にもちゃんとばしっと文化的な差という、その発想の差みたいなのが表れていて、そういう意味で言語体験をしてもらうという意味でも、やっぱ

り文法をちゃんとやるというのは、私は大事だと思っているんです。そういうところも含めて、システマティックにまとまって言語体験、文化体験をする機会というのを用意されていたほうがいいと思います。

あと、よく思うのは、コースとして提供するというやり方がありますよね。言語科目何単位と、あと地域研究科目何単位というので、まとめてこれだけ履修条件、例えば20単位とか30単位とかというのを履修したら、何々コースを履修しましたよという、それこそお免状じゃないですけど、ディプロマじゃないですけども、そういうものを出すとかというような試みをいろんなとこでちょこちょこ見ます。それは面白いことだなというふうに思いますね。

それは私が学生の頃は既にあって、例えば上智の外国語学部は欧米系の言語しかないんですよね。ですけど、アジア文化副専攻というものがあって、例えばイスラム圏研究のすごい人たちがそろっていて、ある程度何単位とか取れば、その副専攻を履修したというのがもらえる。私たちがいた国際関係論も副専攻がありましたし、そういった形でもうシステムとしてまとまって、コースとして準備しておくというのは一つ手かもなと思ったりしました。というのを、先ほどお話を伺って、思ったりしたことでもあります。

それは一つのやり方の話でしかないですけど、英語をちゃんと頑張ってもらう。ちゃんと使えるレベルまで、できれば頑張ってもらう。加えて、英語だけではない世界もちゃんと知ってもらって、日本語の世界、英語の世界、そうではない世界と、3つそろっていればさすがに相対化ができると思うので、自分の中で、というところまで持っていかないと、何ていうんですか、認知が偏っていくみたいなことがあるのかもしれないなとも思いますので、ぜひ。

そういう意味では、もう同志だと。皆さん、何らかの形で外国語教育に関わっていらっしゃる先生方だと思いますので、一緒に頑張っていきたいなというふうに思っております。ありがとうございました。

小林：ありがとうございました。それでは、時間も参りましたし、よろしいでしょうか。

加藤：ありがとうございます。

〔付記〕本講演は2023年10月27日（金）16:30－18:00に対面方式で実施された。

（編集：教養教育センター准教授　箕輪　茂）